

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

東訓永蹟記

再改

三



經濟學部 研究室
5
1621

經濟學部
研究室
5
1621

嘉永七年

十卷之内

家訓永懷記再改正 三

孝心之事

修身治家事



41216

孝心之事

孝心之廉

目錄

- 一 父玄公親語和合事
- 一 子小孝所為事
- 一 孝道事
- 一 父代公增友事

- 一 親近の事
- 一 父老公画像の文章
- 一 我画像の古語
- 一 我意の箇條往事

修身治家廉

目錄

- 一 我家主人の相談中
- 一 古歌持作者の思案
- 一 良薬苦口心得
- 一 諸家と取入の事

一 家起之事

一 合財之報方事

一 傾身之事

一 我若年人業事

一 永讀之心得事

一 高人力上存事

一 諸人後世心得事

一 若年者身儲方事

一 父玄公の志家と云ふは親子
夫婦兄弟睦まの家内和身也
河大石高家分しての程勝たる
常小隔居る清の心と云ふ
易小和揚と云ふは町人を
皆新醴酒と云ふは市居る

心易の道却而少悔三人馬起者
不可悔を勿論也聖公外子任是
内心不起ゆりて自知在己と若同
發任知も孝行と志起の由
此し少少の悔く孝行と清我
身心苦難煩く孝行と中

弟の時...
孝行の...
中...
是又...
其心...
如平也...
免角...
日教

ゆゑに孝のこゝろに思ふ事——
子に孝成るといふ親の心は、
子に孝成るといふ親の心は、
あつて知れぬ——
田舎のあつて
と親の産付。又もつて若も親
ぬふふ。——
因縁にて其子形

のよゝこ成へ——
孝の身は孝心
なり。禮は何をも子に孝行の道
教むる。言ふ人の子は親の
孝行の身と。謙中婦睦愛
ふ。不能為。邪もつて子孫
長くとる事——
其の身

心の中を直感したる兄弟妻
子に必要なるものは皆人親
者も併に分別をたしめざる
然るに親の志は其の如し親
に如行要す

一 子小孝の行は親の志に其親の

振専一に其身を孝の行に
盡すは若し其の志に
生仕振子孫に順之傳之家
長久しき世に成る事法也
之を親の孝の行に盡すは
一は親の志に其の志に

の三三居時を使事し中を以て
若くは時後報し言ふ心と用
ひし處

一 孝は父祖を令し内を勿論
死後を以ては成事し子に報を
し且を報しる孝子と思ふ

ハナク吉く如く

初めの中偽あり世中不

子と思ふは我輩の事なり

父祖を令し内を勿論
死後を以ては成事し子に報を
し且を報しる孝子と思ふ
家業を励み身は独保者心なり

して親を養ふ事父母
 孝也。然るに親を病む事
 亦孝ならず。故に親を病
 むるは孝に非ざる。又
 心も安んずるに由らざる
 事也。故に親を病むるは
 孝に非ざる。又親を病む
 るは孝に非ざる。又親を
 病むるは孝に非ざる。又

氷のさう丸もさう丸も
 親も母も孝事なり。又
 難と心得る事。唯の建
 時節なり。又孝なり。又
 生心を養ふ事。又例
 孝行なり。又孝行なり。

物もなり記しむるに親を徳
と雖後句偏に事と云ふ死
後の孝は何程も有らば
才一我ら身と大切なるや
命長久の身と能くしり弟
と憐るる孫と存養教育し

生る家永懐し心持是皆親
と之程と事なり弟也皆親後
世に道徳も亡却被るる夜分
採少知又。眼目免はりしと日の
當と考。免倍しし起中
魚——目——も 跡をたひ

送書 奈日前と多
硫海真起其身持致得
持山の 勝負事ホリ携
いそふん少存介一旬隔事い
一 父代を平為とお言ひ志。子
代にお励佛有徳を成る親に

向い月後能極致の息ふ宜
事也 聖神をりとも親より
懐徳をいさるゝ生る物也
若くは父の志を己の志
親の徳を己の徳とすべし
うらまをりあふなり 愛とん

子代より徳を承け申す親の
自後を憂ふ由事一と我久
考し得る親より父母あり
増て大成家習徳徳の若ハ
親より徳難有事 常々忘
ゆるべし所也済心慈報ハ子孫

全と親必中々也勿論家習
先程より代々傳へるものと心
得我り物と存し申す
大切にお守り又後代に申す
お徳も續け申す申す所要事
一 親の徳事より得る事 子

子孫とのを諫言小切しぬ
御重之重中少曲し不用
しりつて腹お和しと諱し是
し甲へし一後仮知事
中ゆを不直事し

一 我父在乡村代目孫翁知

名法如常法名機山玄公序皇
画像上記文旨

一 當家古代父名達世幸指老
お代を父よりおくまはるお丹徳と
抽しし程を之と書業とおひめ

家事の経緯と立見守中
お父別 東部に店との宛
勤乃九年を中二の
我を信と強く今都鄙
商店繁華といふは皆世
成—おうま—る所也清也

志即せざるを免其遺像と画
がせは物と記あるを孫
沖君徳永く後金に

仮和の樂—むらあ—果
身と思ひ出たてなれ—あ

嫡子七代同書 薄書

我が画像と徳文

一 我知より父の作と家業
他やうく家業を専ら守り
得財要を意欲なく守り
徳先之祖傳を忠告不申
お守に守夜意如く都鄙

お店勤行院を専ら父徳
徳先徳を家業とし先年一
氣に〜〜画像と画うせ
心得した先家訓記録と作り
お守に守の戒と徳を専ら守り
守に徳を守保初と徳と

あまの事 あつた

一 明日の事、いふに致し、明年

この年、今年、稼行、至し

忠孝、道、其中、至し

一 稼さく、所、商人、托ひ、は、徒、小

日と、後、者、案、の中、と、知、る

一 門、程、を、ち、切、お、守、我、家、業、第

と、進、初、より、学、第、一、所、要、也

一 富、を、成、る、禮、儀、と、忘、る、る、所

一 勝、食、と、知、る、深、徳、と、慎、む

長、壽、の、事、を、精、心、で、身、を、保

つ、保、物、也

かたのりしむる身いづれも
後の世の業とたまたまおもひ

時化に丙午年十月

長久村長目録書

右の箇條を種々認む

一 明日の事、今も後、明も
入用、今年、稼穡、並
忠孝、道、其、中、を
は、條、の、法、事、精、也、と
言、若、右、事、長、中、り、り、の、後、は、
用、向、明、を、延、一、條、都、而、事

心後うそ成時と海世も
未熟なりと家とあるも
多ふなりと事人少人なり
ゆらぐ明年と好相と七年相
月ひは秋友乃於愚果多苦
一舟一山何の思も思も

と合別と出た若事とと家
乃と事と親子兄弟夫婦
睡む親老妻或は多病
あや年なりと好相と好相
由いふ事と親も親も使く
つと事と事と事と事と事

子孫蕃而裕もを孝と稱
ふと是を孝と稱しとて裕を
しとて孝と稱すの死とを稱す
お如くはたかくとも孝と
善の時を孝と稱す孝子徳を
難得と為す右解なる時を

心河を親と称すは木の根の心
如くは一生を孝と稱すは
肝心の所命の心をたがふは
孝もその孝心は虚なる
徳居るを孝と稱すは
心は徳を用ひて

善き方らへて善きありて者著
多き者なり是へて善きありて
己を以てて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
事善きありて善きありて善きあり
己の善きありて善きありて善きあり

起て善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり
善きありて善きありて善きあり

臣は若くは身持ゆらぬ
よふことかゝる家と云ふ事
我の御恩博くは
起立し 親妻子使く扶助
しりし御仕へは是が事
余事なうしに親しむ事

と程也
重き也 若くは
昔非と云は 身も
さ事所也 生活
な事也 若くは 親
近也

辨ひのあはれ心を盡し

忠孝のあはれ心を盡し

一稼起るる所高人極ひ居徒小

見と遠方者真の事を知り

中徳高人しり者たる稼業は

身分存るる所高人極ひ居徒小

志と心とを圓く稼起るる在る

其心は高人を極ひ居徒小

由り起るる所高人極ひ居徒小

又他の心を極ひ居徒小

柳忘事 かく聖二日一

高麗記 かく入用おをり

身とあつてのききんをいふは
子徳のふんきんをいふは
一柳の首をいふは
いふは
はるる
善微をいふは

乞道ほどの好なり
中世の好なり
田原の好なり
是は
後
才

形汁養ありありの形汁成を
口の先十流の盤に先を和め
一著ありまの縁げの種を
一城とあり居中より出
自と成るあり若し神楽心生
るよあり一を心内と成る歩

志はの月より板に向ひ養
微りや一は時の心と一城あり
形ハ商人のみのもや也也
千種店常人役あり一役あり
一は世の心成魂と一あり
一は心ありぬを和役あり也

市日極一りなき事也何時布
之有しる言ふは正格勅命
一曰作本物取之新不抱
こゝに件多中つ獲事也
修古物未何果他家にあり
願取杯の物未切符をば

可成り件石同程事也但高
台程三年と名ある古物をば
殊に五傷高古者一日少後
宛をひ注し一山時を
十二三年とつとる言母の
南州にお傷るるは三年

おのちの事なるを尊とて
ちの事なるを柳とて又宛をひ
くくしん所をもつたの事くくしん
くくしん所をもつたの事くくしん
くくしん所をもつたの事くくしん
くくしん所をもつたの事くくしん

生之根より空儀の事述也

おのちの事なるを尊とて

一所投をち切小お守我の事述也
知あり字筆一肝要也
日條一所投をち切小お守我の事述也
諸の儀捨負部而思事一致

時を以て重料なりは是を以て
為す事勿論也我の事
も亦是に補するは御沖
控は有る事然れども是
早に我の事は是れ我の
事心得る事ならん事

と思 御大名様方の御奉
行御沖御控は是れ是れ
少き事待せらる天下の少
事控は是れ是れ別而御
の高人目と我の利益と
ち御控は是れ是れ是れ

あつては、善き乃の庵中、うづゆる
あま心得遠如年の如印の飛来、
心と後、山阿と心、真と言
に傾行、心、我、家業の前、
道、成育、その也、真方、之、前、之、者、と
河、と、と、あ、る、り、と、あ、る、と、我、家、業、と

道初より、お、子、に、せ、と、う、ら、ま、
り、ま、り、種、の、肝、要、也、中、人、を、あ、る、
家、保、り、と、く、い、ま、存、出、情、致、し、ま、
の、道、と、言、ふ、理

河、の、の、の、の、の、の、の、の、
種、の、の、の、の、の、の、の、の、

一 富と成る 禮義と高るる所
は 操録の家習を世に伝ふ
所 物もてち切お守りし事
も 徳の行要也代
持 徳の行要也代
一 徳の行要也代

豊中を成る 富と成る所
立 事なるを父公中 楽善
薩ハ 實の事程のむ 但 徳の
と ぼろと言ふも 石のひと
身 上 徳みの事少 徳の
心 なく 徳む 徳の事

兎角善婦人徳く者なるを知ら
心は入一悔る後世に善人たるを
沖穀と名家と起一は沖穀
徳亡知「後さづ」徳母の家業一
能く守り守り上宣ふはい知る貨
素より一帯力振一

友人情必也とて一徳と身と備
め家とおく先伐後世一徳由
りく徳励筆一中人徳田舎る
己お希者あるに時を一日徳をちる
いふ徳者右解慢心起し時を
身とより一徳よ向ふらぬ徳徳

ものくもよきは徳を居るもよき
務むる實のりやうに實なる
いふより善なる愈強く徳は
りて夫之を如徳人の思む如空
務むる成事と名すしよ
教を代と早に家業と志す

と并く富もあはれ起す那

一 飲食と情 徳徳と情は長壽
の基骨精は生身はつる徳もあは
は條命と壽のまじりて病あはれ
也 徳徳は耽擱あはれ情弱
お持たぬしつる家の保も一骨

情盡果何日展
と積其醫自療を
病言恨一
是拙行
はし
孫忠

皇女よお勅
孫とた
家之
何事
也
一

偏に長壽をせむ思ふが如く
我の命は此の子の命に
親の命は此の子の命に

右博識富家の子は自ら
子孫を世に傳へんとす

学園の者も皆の如く
我の命は此の子の命に
親の命は此の子の命に
有るは此の子の命に
此の子の命は此の子の命に

備身活象年

若知是

一 我家諸事一主人自任後一五年
ひの家法永守下 知事の若急
りるる事身は知事人としてお供
んと何れも一は務め外忠臣用と云
己好所の存心事高に成入道
邦古體作一若茶酒宴極舞了

あけ 雲の 公の 御成行を 是
右 御成行の人を 是と 我の 家業を
道と 暗あはし 傳はる 伝世の 業は
山 峯 是を 依る 南の 山に 依る
時 窓を 是の 世に 振振と
写し 是の 世に 自憶 忘懐

我が 尚又 是の 世に 是の 世に
自 成 其 後 是の 世に 是の 世に
は 御成行の 世に 是の 世に
は 御成行の 世に 是の 世に
侍 是の 世に 是の 世に
は 人 是の 世に 是の 世に

乃親友主人之方
右解之帝
常買之多
因亦私始
也い果没落
母精抽之

と若世と少なり物まを代
又子孫の事
今家別
湯店
下

一 柱人左敷持仰一 終つまで
ひの 聖ち身たりしは 柱の化
あま何人かうらふは 聖業の在
左高に保つて 彼君の如く 聖業持
御座り得るは 此柱の如く 聖業
行はせしむるは 聖業の在

明教一 忽ち半におよばる
与る御也 此行中 此年秋
柱の入る御も 勿論り 柱の在
地も 此中 聖業の在 聖業の在
此中 聖業の在 聖業の在
聖業の在 聖業の在 聖業の在
聖業の在 聖業の在 聖業の在

日方日集おのりあはる
あまき居るるあはる
と

一 良葉口ふぐー
今言早
うふのたゝおるじは面お
ら神さ意の事まー面お

ぬ事一葉と其身今う
と初るー 相又商
あまおのりあはる
と
他よのせけ新と心
容身あつて眼目と振

物借家初より一萬と少くも意見
ありしは、常々其の少くも死お世も
実をせし海借くるとは、根幹に
其月より、年、常々其の少くも
只其に我、由、事、り、ち、海、世、物
都而、商人、存、存、也、居、也、世、一、番、面

白きもの也、所、り、ち、海、事、り、ち、海、
世、物、常、々、其、の、少、く、も、死、お、世、も
著、り、の、川、は、ち、前、面、也、借、さ、ら、
ち、海、事、り、ち、海、事、り、ち、海、事、り、
ん、南、西、指、物、借、ら、ら、ん、も、百、
あり、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、

一 諸家より入るる年俵の事一其
之人好道之徒の俗者也悔る
と云ふ事と云ふ所也一兎角
多しと言ふ言はるる所也
一 諸の家起るる縁由一山岳の
又ハ復物也一と云ふ事あり

此の海山言懐如種との事ハ皆
厚海也と利是云々一十年
言白高と云ふ店名の事也
と云ふ事と云ふ事と云ふ事
又ハ利是云々と言ふ事也
是より云々云々云々云々云々

次子子城山海向傳行を

一 家と起り各在國より〜高利

やつ番のちおとす一保行是

利是の亦高利と今更に出控よ

山争の折〜山捕〜山成

身と果と為る事 空名全用

たう山向傳行を都而金貨にお

南〜利〜〜〜 始終〜如傳物

なり心益無心名よ〜〜他名あ

山争〜〜〜山争の月名は争

山心争と名と山争の争と

争〜〜〜争と山争の争と

利是之向多く其成るに能く
是也利は何程か其苦勤并
しし其成る極中其苦勤
難あり其成る極中其苦勤
之世悲利之成るに其苦勤并
し其成る極中其苦勤并

常一極又借る難信とありし節
安利益并其成る極中其苦勤并
其成る極中其苦勤并
其成る極中其苦勤并
其成る極中其苦勤并
其成る極中其苦勤并
其成る極中其苦勤并

好くはつ時を自らに返す所の意
一は上り人

一 徳人身之徳は山師又は古
年より其徳を古徳に奉るは
身之徳を古徳に奉るは古徳
空虚に古徳を奉るは古徳

一 徳は古徳に奉るは古徳
心得山師古徳を徳に奉るは
抱り古徳に滅亡する者多し
身之徳に奉るは古徳に奉る
思ふは古徳に奉るは古徳
古徳に奉るは古徳に奉る

保平なる者あり

但去者といふは空平空平也

商の物ある情事といふはさち者

の者といふ

一 我中之氣より家業を道と打入

中をよみて家督といふは家秘名

事未だづき暇なくよりの事

学同志を徳義を却而心得

あり酒を喜ぶよりさるる暗

負事つる事行只我の家業と

励壮年より為る情事といふ

何と千歳より好む事といふ事

悟して末常ふ善若年より
丹精し甲斐の成るを以て
身の家と起し家業の道
と成し勤行既ち年余年
を練り志尚も身と悟善若年
を以て家と起きよき事

秋の悟りん志

一 水滸の道は先考の志を以
て家業と守り其方と修り
と起し中と起すの徳を以て
招えし善若年悟り丹精し依
悟りよき事なり

我心若此然と云く悔世の如く
心の中うせ家のあつむ道も自由
り兵衛のあつむ皆腹心備
石子精石健ぬる也物之を提海
あつむ物情弱く精石序
あつむ家の石く先高にさす

生身も年長よりあつむ人の
あつむ物も世をあつむ物又
能く提海は提海家のあ
あつむ提海も提海もあつむ物
あつむ提海も提海もあつむ物
あつむ提海も提海もあつむ物

一
子の容は骨格也親と我
と縁は子と親と行安
と云若年かを身と云印持保
壽の平長るすう年家のた先
身は云ん多遠て陸つと知へ
高人の身と伸縁を云枯とい

身と親と初と云ま長日のあう
とく容易と伸と云知と云城
肺と云枯種日ぬらうと云
らうと云伸と云ぬ又城と
修と云ぬは字と初と云長日
あうと云伸と云ぬと云知と云

趣は時々の秋程月々如くありて
川くと減事程早し悔之志り
———の改革
竹藪の下

若知る一励働可きもの
たぐくく———

一 佛道は法に氣を和らぐ
教也多佛題目も皆極楽
往生と遠く———
親と別我身は法母は我か子孫也
子孫皆人なり時を親極楽と
思ふ如くは親地獄なる所也

悔而報之他物極矣之界公孫
行心之何一可修多心深并心身物
思面之致中一可無あより

一 夫玄公江下居之修性者多自
身少者扱悉之難多利平案之以
思心身弱之爲成甚之苦苦方之并

我世第之江園者之修性之居之入
代之修性之修性之修性之修性之
我性之修性之修性之修性之修性之
期之及之修性之修性之修性之修性之
あ之出之修性之修性之修性之修性之
あ之守之修性之修性之修性之修性之

若年者之修性

任居を身分はた先づく一り
我れ生中をて思ふ事とあり及
出居方と作事ありは生を全果
事と推してはたと心取る也
御小名由河部信之守東美年
橋上理方川口出方都定とあり

毎都國行はたしり
あはれなり
とありん 孫孫^孫在る言故に
り何とと事と推してはた
るありん性もはたしり
別業ありん者有應^應心法

東坡先生の理を以てて世に東坡
稱する者且其獨に其身を公の
徳に以て先儒者同其子と云
ふ聖書持論学文物行の意一
しるも人々皆忽ち友を徳と
智日然る者之を友と未だ其徳を

有るに其徳を流して其徳を
以て知る者其徳を以て其徳を
身にして其徳を以て其徳を
以て其徳を以て其徳を以て
其徳を以て其徳を以て其徳を
其徳を以て其徳を以て其徳を
其徳を以て其徳を以て其徳を

もてあやうし 者も成老也うまう次
博の積むるに 實と名義の記名
西元より積むるに 又之作記名
感へ― 中国撰本 ち印事― ありき
はまお守 家名に 同 博の積む
よめ 博へ― 同 博の積む

若くは 幼少の博者 ありき 積むる
小阿ふり ともある 中 同 博の積む
いりやうと 田舎吉 ともある 博の積む
博と 博の積むる 同 博の積む 我
家 離れ たり ありき 博の積む
先の 博と ありき 博の積む 好

自由と市場の経済学



